

病防第317号
令和7年12月1日

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
(公印省略)

病害虫発生予察技術情報について

令和7年度病害虫発生予察技術情報第12号を発表したので送付します。

令和7年度病害虫発生予察技術情報第12号

キク黒斑病および褐斑病の発生が増えています！

沖縄県は、年末から翌年3月の彼岸にかけて小ギクの重要な責任産地となっています。年末出荷用の小ギクほ場において、黒斑病および褐斑病の発生が平年より高めに推移しています。これら病害の発生は、キクの収量および品質に影響するため、防除対策に努めましょう。

1 発生生態および被害

- (1) 病原菌：黒斑病の病原菌は *Paragibellulopsis chrysanthemi* および *Septoria chrysanthemella*、褐斑病の病原菌は *S. obesa* である。
- (2) 病徵・被害：*S. chrysanthemella* および *S. obesa* では初め不規則な褐色小斑点を生じ、のちに不正形、橢円形、円形の黄褐色ないし黒褐色病斑となる。(図1)。*P. chrysanthemi* では下葉の葉表に淡い斑点のような症状が現れ、葉裏に明瞭な褐色斑点や輪点症状が現れる(図2)。病徵の進展により、葉表にも明瞭な斑点症状が現れ融合し黒変する。多発時には大型病斑が増加し、下葉から枯れ上がり、上位葉へと進展する。ひどい場合には半数以上の葉が枯死する。なお、いずれの病原菌も病徵が類似するため、外観的な識別は困難である。
- (3) 伝染方法等：*S. chrysanthemella* および *S. obesa* では被害葉上に形成される柄子殻から雨滴やかん水により分生子が飛散し、周囲に伝播する。*P. chrysanthemi* では被害葉上に形成される分生子が風雨で飛散することで周囲に伝播すると考えられる。また、被害葉に形成された厚膜胞子は乾燥条件下でも長期間生存できる。
- (4) その他：
生育適温は *P. chrysanthemi* で 25°C、*S. chrysanthemella* で 24~28°C、*S. obesa* で 20~28°C である。
高温多湿条件で多発する。また、肥料切れや窒素過多により発生が助長される。

2 防除対策および注意すべき事項

- (1) 発病葉は速やかに除去し、圃場から持ち出し適切に処分する。
- (2) 肥料切れや窒素肥料の過用を避け、施肥管理を適正に行う。
- (3) ほ場の排水および通風を良くする。
- (4) 水滴の跳ね上がりを防止するため、敷草やマルチ等を行う。
- (5) 薬剤防除においては、予防および発生初期の防除を徹底する。なお、*P. chrysanthemi* による黒斑病に対して防除効果が高いのはクレスキシムメチル水和剤、次いで TPN 水和剤である。クレスキシムメチル水和剤は QoI 剤であり薬剤耐性菌の発生リスクが高いことから、TPN 水和剤と組み合わせて使用する(令和6年度 沖縄県植物防疫協会単独試験成績書)。



図1 葉の症状 (*S. chrysanthemella*)



図2 葉の症状 (*P. chrysanthemi*)

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★
TEL：(本所)098-886-3880、(宮古駐在)0980-73-2634、(八重山駐在)0980-82-4933
<https://www.pref.okinawa.jp/shigoto/nogyo/1010700/index.html>

